

物理主義の下での重ね描き多元論（その2・・・緑内障）

著者	柴田 正良
著者別表示	Shibata Masayoshi
雑誌名	「道徳的行為者のロボットの構築による <道徳の起源と未来 >に関する学際的探究」第4回研究会 発表資料
ページ	9p.6p.
発行年	2022-11-13
URL	http://hdl.handle.net/2297/00068069



物理主義の下での重ね描き多元論 (その2・・・緑内障)

柴田正良(金沢大学名誉教授)

Nov. 13, 2022

於:JAIST 金沢駅前オフィス

「道徳的行為者のロボットの構築による
＜道徳の起源と未来＞に関する学際的探究」(基盤研究(A)
19H00524)

章立て

1. 緑内障というより、感覚知覚一般の機能限界と機能劣化
2. 一人称報告(クオリア報告)の訂正不可能性(?)
3. 感覚知覚相互の関係と物理主義
4. 重ね描きによって一人称的世界を抜け出せるか？

おまけ:「幻覚」の定義の試み

発表全体のポイント (1/2)

1. 物理描写との重ね描き、あるいは他人の感覚知覚描写との重ね描きによって、私は自分の一人称的世界から抜け出し、「三人称的な感覚知覚描写」に到達する（経験する）ことができるのだろうか？

結論から言えば、それは不可能だ。

2. あなたが重ね描く多元的描写には少なくとも、(1) 物理描写、(2) 感覚知覚描写、(3) 価値描写（道徳／宗教／美）の3種類がある。

そのうち文字通りに他人と共有できるのは、物理描写だけであって、他の描写は経験主体の数だけ存在する。

発表全体のポイント(2 / 2)

1. 結局、人は各人の主観的世界に閉じ込められていて、客観的世界を知ることはないのだろうか？ しかも、それは、他者が主観としては登場しえない独我論的世界ではなかろうか？

ある意味で、答えはいずれも「その通り」である。しかし、そう心配することはない。。

2. 経験の主体の数だけの感覚知覚描写が重ね合わされ、一人称的空間が重ね合わされる。残念ながら「同一の客観的な感覚知覚空間」というものは存在しない。だが、本当に、それは「残念」なことだろうか？

幻覚とは？

「幻覚」の定義の試み（1）：

幻覚とは、物理記述において対応する物理的存在や物理的性質、あるいは物理的出来事が描かれていないにも拘わらず、感覚知覚記述や価値記述において描かれた物体や性質、あるいは出来事のことである。

「幻覚」の定義の試み（2）：

幻覚が生ずるのは、感覚知覚記述や価値記述において物体や性質、あるいは出来事が描かれているにも拘わらず、物理記述において対応する物理的存在や物理的性質、あるいは物理的出来事がそれらに重ね描かれていない場合であり、その場合に限られる。

おしまい

柴田の研究関連webサイト

<http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/>